



カメラマン物語

第5話 竜次モノクロに出会う

竜次モノクロに会う

咲き誇った桜は、たくさんの花びらを川に流しながら、皐月を招き入れる。

今年の天気は気まぐれで、5月というのに、朝夕は肌寒い。

テレビはゴールデンウィークの話題で忙しそうだ。

つける度に高速道路の渋滞情報をやっている。

だけど、結城竜次家では、特別な行事はなかった。

父も母も仕事だったからだ。

父は外食産業に勤務している。ファミレスの大手チェーンで休むどころではなかった。母も派遣会社に登録していて、今は大手スーパーに派遣されている。

何時もの様に、同じ時間に朝食が始まり、何時もの様に家を出て行く。

母は竜次が中学生になると働き始めた。

小さいが一戸建ての家だ。それなりのローンがある。

父は私立大学出で、最初務めた会社のリストラに会い、外食産業の会社に入った。

もう10年になり、ユニットマネージャーと言うポジションにいるらしい。

工学部出身の父は、何事につけても理屈っぽい。それが律儀な印象をあたえているらしく、浮き沈みの激しい会社の中では重要視されている、そう言っている。

母は文系で情緒的だ。未だに韓流ビデオにはまっていて、先月韓流仲間と韓国にいった。竜次は韓流の何処が良いのかよく分からない。

おちょこちょいだが、明るく憎めない。

そんな母親がいるから家族はうまくいってると思う。

竜次も、適当ながら大きく道はそれなかった。

いや、心の重心がブレる様なものに出会わなかっただけである。

二人が出て行くと、家はガランとしてしまう。

竜次の学校は当然休みだ。

しかしゴールデンウィークと言ってもやることがない。

友達は旅行やバイトで忙しいみたいで、竜次は結局なんの予定もなかった。

竜次は自分の部屋でスマホをいじりながら、四畳半の窓際のベッドでごろりと寝転ぶ。

いじることに飽きて、ぼーっとしていた

窓の外を見ながら、この前の事を考えていた。

古い校舎での出来事は夢の様だった。

荒木先生の事が、頭から離れない。

要所要所は鮮明に覚えている。

何せ初めてプロの撮影現場のアシスタントをやったのだ。

それも、エロ雑誌のグラビアだ。

性的にも刺激が強すぎる。

しかし、現場の緊張感の所為で、隠微な雰囲気は全く感じられなかった。

あのハッセルブラッドというカメラ、知子さんの真剣な顔。

特に、大股開きを下から撮影している荒木先生。

正に夢だった様な気がする。

「あっ、そうだ。サユリさんの写真だ」

ヌードスタジオで撮影したことをすっかり忘れていた。

部屋の隅っこに放り出していたカメラを取り出した。

電源を入れ、小さい背面のモニターで再生した。

写っているのだが、肝心のサユリさんの顔が暗い。

嫌な予感がした。

急いで、パソコンをつけた。

カメラから、コンパクトフラッシュを取り出して、パソコンのカードリーダーに差し込む。

認識されたコンパクトフラッシュから、写真をデスクトップにコピーする。

けっこう時間がかかる。パソコンが古い所為だ。

「夢中だったから、結構一杯撮ったんだな」

コピーし終わった写真データをダブルクリック。

データがパンと開いた。

竜次の顔が曇った。

サユリさんは逆光になっているので正面が真っ暗だ。

撮影の時は気にしなかったが、カメラは逆光として露出を計算している。

さらに、カメラはぶれていた。

後ピン。ピントが背景に合っていて、サユリさんに合っていない。

フレーミングがめちゃくちゃだ。

ため息が出た。

「一生懸命でも、ダメなものはダメだ」

よたりながら、ベッドに転がり仰向けになる。

もう一度ため息が出る。無力感が動脈の血液に溶け出し全身に広がっていく。

「どうしようかな」

窓の外は快晴。

爽やかな皐月の日だ。

陽射しが竜次の四畳半の子供部屋に満ち溢れている。

そして天井をボンヤリ見ている。

なんだかとっても大切な事を考えているんだけど

今、それをしなくても死にはしない。

後でも良いのかな。

本当に困った時にしてもなんとか成るんじゃないのかな。

肝心な時に何時もやって来る、責任放棄の感覚。

それは、自分自身のダメージにあった感情を救うための、安全弁なのかもしれない。
心の中で、違う竜次が思っている。

『まー、いいか』

竜次はいつの間にか、眠ってしまった。

突然AKBの曲が流れた。

竜次のスマホが鳴っている。メールの着信だ。

寝ぼけ眼でスマホを取り上げた。

「美穂ちゃんだ」

よだれをふきながら本文を読む。

「竜次君、この前の事は許して上げるから、頼みを聞いて」

竜次はホッとした。

ママさんバレーの集合写真を失敗してから、メールの返信すらない。

無視されていたのだ。

たった一人のガールフレンド候補だ。

急いで返事を書く。

何度かメールのやり取りをする。

「了解」

そう、打って修了した。

結局、バイトの依頼だった。

「全く美穂ちゃんは、用事のある時しか連絡をくれない。自己中だけど、それが可愛いんだよな」

ブツブツ言いながら、用意をする。

竜次は国分寺駅で下りた。

ここはいろんな路線が乗り込んでいて賑わっている。

近郊に大学が複数有り学生が多いのも特徴だ。

大学の友達が国分寺に住んでいるので、何度か来たことがある。

オシャレでもなく田舎でも無い。

住むには丁度いいかも知れない、そう思わせる雰囲気がある。

ほぼ時間通り。

南口で待ち合わせだ。

女子大が最近出来たようで女の子が多い。

しかし、似たような女子の中で美穂はひととき目立つ。

アイドルのオーラが半端じゃなかった。

美穂が竜次を見つけて、小走りで駆け寄ってきた。

竜次は、犬が尻尾を振るように手を振る。

「美穂ちゃんはやっぱり可愛いな」

竜次はやはりだらしない。

歩きながら、話を聞く。

先月から小さな写真展を、国分寺の喫茶店で開いていたとの事。

「美穂ちゃんが写真展を開いていたの？ 言ってくれば見に行ったのに」

「ううん。そんな大げさなことじゃないの。写真に理解のあるマスターにお願いしたら、すんなり決まっちゃって。2週間に一度1枚、5枚の写真を額に入れて展示することにしたの」

「へえ、どんな写真を展示したんだい？」

「テーマを決めて撮った写真よ。春とか、夢とかとても抽象的なテーマなの」

「ふーん、そのテーマを5枚で表現するんだ」

「そう。いわゆる組み写真という奴よ。最初は楽だったの。たくさん写真のストックがあったし。だけど4回目から、作品のストックがなくなったの。自分の作品だと思った写真が意外と似通っていたのね」

「さすが美穂ちゃん。ちゃんとアートやってるんだ」

「茶化さないでよ。行きづまり始めた時に、声をかけてくれたのが、森永さんというカメラマンだった」

「名前は知らないな」

「そうね。派手なグラビアなんか縁の無い先生よ。真面目な写真雑誌に時々載っているわ」

「その先生は白黒が専門なの」

「へー、そんな専門があるんだ」

「それも、フィルムオンリーなのよ。びっくりするでしょう。私もデジタルだけしかやったことが無いから、興味津々だった。竜次君はフィルム撮影はやった事ある？」

竜次は驚いた。この前フィルムの世界を知ったばかりだったからだ。

荒木先生のアシスタントをやった話しを、美穂ちゃんに話した。

「竜次君、すごいわね」

美穂はまじまじと竜次を見つめた。

「竜次君て、すごい強運の持ち主かも知れないわね。荒木又二郎って知ってるわよ。大手代理店の有名なカメラマンで、作品も知ってるわよ。確か過疎の村で、その人達を撮影した「太陽の人々」という作品は賞を貰ったはずよ。私も一度見たけど、被写体を見る目が暖かくて、それでいて鋭いの。月の光だけで撮影された、村のおばあさんの写真は有名になったわね」

竜次は何にも知らなかった。

「そんなに有名な人なんだ」

「あれ、何にも知らないみたいね。もう少し勉強したら」

「えー、写真って勉強しなくちゃ駄目なのかい」

「色んな事を知るのには、別に損にはならないでしょ。私は外国のカメラマンが言っていた言葉が

大好きだわ」

「どんな言葉？」

「カメラマンはクレバーであれ」

「クレバーって英語？」

「そう、賢くあれって事よ」

「私が良いなーって思うカメラマンは、みんな文化人なの。色んな事に対して、ちゃんと自分の考えを持っている。そしてその考えは歴史や文化に精通していて、聞くに価する意見を述べるの」

「文化人ねー」

竜次はピンとこなかった。

勉強は嫌だし、写真を撮る事と文化人である事の関係が分からないのだ。

カメラマンと一口にいても、色んな種類がある。

町の写真屋さんから、コマーシャルのカメラマン。新聞や雑誌社のカメラマンもいる。自然専門や動物カメラマン。スポーツ、風景、映像作家。まさに様々である。

カメラという道具を使って仕事をするのは一緒だけど、現在はかなり細分化されている。

動画のカメラマンもいる。ムービーに対して静止画の事をスチールなんて呼び方をする事もある。

優劣は付けられないが、カメラマンの中には、大学の講師をする人もいる。

どんな世界でも同じだが、まさに様々である。

結局、その白黒の先生から、バイトをしてくれる人を探して欲しいと頼まれたとの事。そのバイト先は現像所だという事だけは分った。

「ふーん、話しは分かったけど、バイト代はいいのかい。」

「時給869円だって。だけど写真に関係しているのよ。竜二君ならやるべきよ」

「時給869円って、最低賃金じゃなかったっけ」

「そう、知らないけど」

美穂はとぼけている。

しかし、なんか嬉しかった。

美穂ちゃんは僕のことを思って話してくれたんだな。

そう思うとニコニコしてくる。

「わかった。頑張るよ」

「ありがとう」

美穂は、栗毛色の髪をかき上げながら、ややアヒル口で可愛い笑顔をみせる。

竜次はそれだけで満足した。

しかし、美穂ちゃんがこんなに優しい時は、何か魂胆がある証拠だ。

それはわかっているけど、それでも良かった。

駅から10分ほど歩くと古ぼけた二階建てのビルについて。

陽光社と看板に書いてある。

中に入ると、中年の髭ズラの男が現れた。

「森永先生、バイト君を連れてきました」

ごつい顔が、にっこりとした。熊が笑ったようだった。

「やあ、美穂ちゃん。頼みを聞いてくれてありがとう。今暗室作業を覚えたいなんて子はなかなかいなくて、困っていたんだ」

森永先生と呼ばれた男は竜次に向いた。

「君か、よろしく頼む。カメラマン志望だってね。デジタル全盛の時代に暗室を覚えたいなんて、見上げた心構えだ」

竜次はびっくりした。

「いえ、僕は」

その時、美穂が足のふくらはぎを蹴った。

「いてっ、痛いなー」

美穂が一步出る。

「竜二君、お願いね」

凄い顔で竜次を睨んだ。

背筋が凍るような瞳だ。

竜次は黙り込んだ。余計なことは何一つ言ってはいけない。

そう確信した。

「美穂ちゃん、約束の現像機、今度持って行くね」

「きゃー、ありがとうございます。嬉しい、美穂の暗室がやっと完成します」

「あれ、美穂ちゃん、暗室なんか作ったの？」

「そうよ、現像をやりたかったの。場所は物置を改造したんだけど、備品が結構たかくて。森永先生に相談したら、余ってるものを頂ける事になって」

「そのお礼が僕って事？」

「一緒に覚えましょう」

『何の事は無い。交換条件じゃないか。しかし、これで美穂ちゃんに貸しが出来たし、共通の趣味が出来たわけだから、いいかも。バイトをしなくちゃと思っていたし』

竜次の思考は良い方に解釈したようだ。

「そいじゃ、失礼します。竜二君、頑張ってね」

にっこりと天使の様に微笑んで、出て行ってしまった。

「そいじゃ、竜二君と言ったね。美穂ちゃんは今日からいいと言っていたから、仕事の段取りを覚えて貰おうか」

『今日からなんて聞いてないよ』

そう思ったが、ここまで来たらしょうがない。言われるままにしよう。

「現像の事、何か知ってるかい」

「いいえ、なんにもわかりません」

「そうだろうな。デジタルしか知らないだろうな」

「すみません」

「そいじゃ、一からだな」

森永先生は熊みたいにゴツイ雰囲気だけど、声は優しい。

ここは案外いい職場かも知れない。

「たかこ。たかこ。チョット来てくれ」

森永先生は奥に向かって呼ぶ。

奥から扉の開く音がする。

「ナニ、パパ」

女性が奥から現れた。

黒髪のショートカット、スラリとしたスタイルだが、プロポーションはしっかりオウトツがある

。ピツパリとしたTシャツと黒いスラックス。

きりりとした瞳が美しい。正統派日本美人だ。

その瞳が竜次をジロリと睨む。

竜次はゾクリとした。

「たかこ、新人のバイト、竜次君だ。例によって最初から頼む」

たかこの顔が曇る。

「又、教えるの？ この前も一ヶ月も持たなかった。一ヶ月もったのも私目当てよ。言いよって来たのをはねつけると、次の日辞めたでしょ」

「あー、そうだったな。だけど今度は、カメラマン志望らしい。美穂ちゃんの紹介だし」

「美穂ちゃん？ ああ、あのアイドルみたいな子ね。だったらなおさら、オタクなんじゃない」
辛辣と言うか、ハッキリしすぎている言い方だ。

「僕はおたくじゃ有りません」

竜次はやっと声が出た。

「まあまあ、そんなにツンケンするな。頼んだぞ」

そう言うと、別の部屋に行った。

「私だって忙しいのに」

ふくれっ面のまま、竜次と向き合う。

竜次は、その真っ直ぐな眼差しにドギマギした。

「しょうがないわね。頼むから早く辞めないでね。私は鷹子。鳥の鷹よ。森永の娘」

「はい」

「年は多分あなたより少し上」

竜次は美女に睨まれると、妙に素直になる。

成年生まれの所為かもしれない。

薬品の匂いのする部屋に二人。

「まず、ここで現像するのは白黒フィルムと印画紙現像だけ。カラーはしない」

「なぜですか」思わず質問が出た。デジタルではカラーが当たり前で、白黒にするにはPhotoshopでグレースケールにすればいいからだ。

「カラーは、いろいろ難しいのよ。黙って聞いてなさい」

「は、はい」

『怒られてしまった。黙って聞こう』

「ここは、パパが趣味でやってる現像所よ。自分の写真を現像するだけじゃ飽き足らなくなって始めたらしいの。だから普通の依頼はこないわ。特殊な現像だけがメインなの」

「はあ」

「だから、作業はパパや私の言うとおりにして。これは決まりよ」

鷹子は机に、道具を並べた。

「まずはフィルム現像。このステンレスのリールにフィルムを巻いて、タンクの中に入れる。そうしたら上の蓋を開けて薬品を流し込む。薬品の温度は20度、室時計をよく見ていてね。最初30秒連続攪拌、そして1分ごとに10秒攪拌」

「攪拌って、どうするのですか」

「タンクを上下に振ればいいの。約8分位かな。この液の温度と時間が大切なの。時間はパパが言うから、そのとおりにして。時間は来たら液を戻して、停止液をいれる。そして最後に定着液をいれる。10分でいいわ。これでフィルムの現像は終わり。もう蓋を開けてもいいわ。定着が終わったら、水洗。水を流しっぱなしで20分位かな。そしてドライウエルの液に浸し干す。カールをしない様に重りをつける。半日位で乾くので、乾いたら指紋をつけない様に、ハサミで6カットずつ切って、ネガホルダーに入れる。これでおしまい。わかった？」

「はあ」

理科の実験みたいだと思った瞬間、鷹子の言葉がわからなくなってしまった。もともと記憶力は良くない。

一度聞いただけでは、到底頭に入るわけがない。

そんな、竜次の顔を眺めていた鷹子は、ウンウンと頷いた。

「おぼえるわけ無いか。君って成績悪いだらう、顔に出ているよ」

結構、ズケズケ言うタイプみたいだ。いや、僕だから言うのかな。

「後、印画紙現像とか薬品作りなんかあるんだけど、取り敢えずフィルムから覚えようか。本当にやってもらうには時間がかかると思うの。まず、これを覚えて」

そう言うと、ステンレスのリールを差し出された。

「本物のフィルムじゃ無理だから、この感光したフィルムで練習よ」

そう言うと、35ミリフィルムをクルクルと溝に沿って巻いていった。

「うまいですね」

「慣れよ。明るいところで出来る様になったら、今度は暗箱の中で出来る様になって」

「暗箱ってなんですか」

鷹子は、右奥の大きめの木の箱を指差した。

簡単な鍵が付いている。

左右に袖の様に黒い先がゴムで巾着の様にすぼまっている。

鷹子はその箱を開けた。

「ここからフィルムと現像タンクを入れて、蓋を閉めて」

そう言うと、黒い巾着に手を突っ込んで、竜次を見た。

「なるほど。そうして手探りで作業するんですね」

竜次は、大きくうなずく。

「そうよ。これでなんとか分かったでしょ。取り敢えず練習してよ」

「えー、説明はもうお終いですか。なんだかわかんない部分も多いし」

鷹子は、振り向いた。

「君ねー、教えるってのは、とてもめんどくさいものなのよ。あんたは初心者だから特別に丁寧に教えてあげたのよ。あんた、なんか、甘いよね。プロのカメラマンなんて、無理なんじゃ無い」

鷹子は、やや切れかけていた。

竜次は、その剣幕に驚いた。

「あんたさ、私になぜ切れかかっているか、わかんないでしょ」

実際、竜次はわからなかった。素直に授業を受けていたつもりだった。

なぜ、鷹子さんがイラついているのか不思議だった。

鷹子はキッと竜次を睨みつけた。

「目よ、あんたの目」

「目？」

「そう、目よ。従順そうに振舞っているけど、何も求めていない目。与えられることに慣れてしまってる目」

竜次は戸惑っている。そんな事は一度も言われたことがなかった。

「へー、驚いているの。そんな事は言われたことが無いって言う顔をしてるわね」

この人は超能力者か。

「周りに、同じ様な友達しかいないのね。類は友を呼ぶしね」

「初対面でそこまで言わなくても」

「あーら、ゴメンね。根が正直だから。ちゃんと練習しといてね」

そう言うと、奥の部屋にいつてしまった。

取り残された竜次は、黙り込んでいた。

「与えられる事に慣れてしまってる」

その言葉が何かとげの様に何処かに刺さっている。

今まで、女性からいろんな事を言われて来た。

母さんや美穂ちゃんも相当口が悪い。

それは自分のトロさから、いわれていた。そう思っていた。

自分はトロいし、自慢できる能力もない。

成功体験も無い。

「与えられる事に慣れている」

今も学生だから、授業を受けている。

自宅に住んでいるんで、食事も作ってもらっている。

だけど、子供だから当たり前だ。

誰にも迷惑はかけていない。

竜次は、納得した。

「いけない。覚えなくちゃ」

竜次は、生まれて初めて現像タンクを手に持った。